

## 支える人々 着実に広がる支援の輪



少しの時間、集めただけでもゴミの山



観察シーズン前、河川清掃を行う地域の人たち。自分のできることなら、みんなその思いで参加している

自分のできる範囲で協力  
みんなの力がひとつになる

自分たちができる範囲のことで。オシドリグループの行政に頼らない自主的な活動と長年の努力は、人々の心に響き、地域の人たちも支援しようとしてきました。観察シーズン前に数回行われた河川清掃。協力を呼びかけると多くの人が集まります。協力する人たちは「グループのような活動はできませんが、自分のできることであれば協力していきたい」と話します。

歩きにくかった駐車場からの道も、トラック3台分の真砂を入れて整備。まち角にある手作りの案内看板は子どもたちが色を塗り、えさとなる木の植樹には多くの人が参加するなど、オシドリを取りまく環境は地域の力によって支えられています。支援しようとする気持ちは広がり、協力依頼がなくても地域の人が自分で気づいことを自主的に行っています。オシドリ観察小屋の入口や近くの畑に菊を植える天野達由さん（根雨）は「遠くからこのまちに人が来てくれます。周辺もきれいな方が気持ちがいいでしょう。特別なことをしているのではなく、ただ、気持ち程度のことをしたままで」と照れくさそうに話します。



手作りの案内看板が道を教えてくれる



社会就労センターわかとり作業所日野分場は2階の部屋をオシドリグループに提供。オシドリに関する資料が展示されている

### 河川清掃に協力

松田正明さん（根雨）

オシドリを見に多くの人がまちを訪れます。地道に活動を続けるグループの努力ではないでしょうか。少しでも手伝えなれないかと思い、自分のできることであれば喜んで協力しています。



### たくさん来てほしい

中原さゆりさん（下榎）

仕事場が近くにあるのでオシドリのことが気になります。たくさんの方が来てくれるよう絵を書いてみました。オシドリのために何が手伝えなれないかと清掃に参加したり、くず米を持って行っています。



オシドリ観察小屋を中心に地域のきずなが深まる  
今までオシドリグループには、対岸のオシドリが見れる

ようにスコップや双眼鏡、のぼり旗、花の苗、活動資金、雨傘などたくさんのもものが団体や個人から寄贈されました。観察小屋近くでは、早朝から店を開ける人、建物の一部を展示スペースとして貸し出す事業所もあります。それぞれ地域の人は、オシドリグループを支援し、まちを訪れる人を温かく迎えようとする気持ちで行っています。今、オシドリ観察小屋を中心に地域のきずなが深まっています。



## 楽しみが増えました。

「買ってもらえるということで励みにもなります」と話すおしどり学園手芸グループのメンバーたち。机の上には、手作りのオシドリ人形が並び

# ひと針ずつ心を込めて 人形づくりが生きがいに

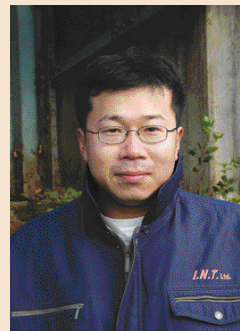
ほのぼのとした手作りの温かさが伝わってくるオシドリ人形。観察小屋に訪れた人たちが土産品として買い求めています。

作っているのは、おしどり学園手芸グループのメンバー。平均年齢は80歳を超えます。毎週金曜日になると町福祉センター（黒坂）に、気の合った仲間たちが集まります。作業は1日中なので、弁当や菓

子を持ち寄ります。

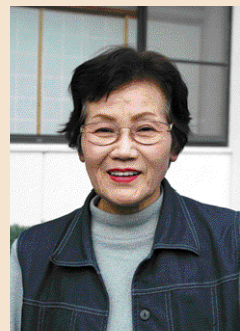
楽しい話をしながらのペー  
スは1日1個。素材は布で、各自が持ち寄りたり知人から譲り受けたものを使い、ひと針ずつ心を込めて縫い合わせていきます。3年前から取り組んだ人形作りは400個以上になりました。  
始まりは、坂出清子さん（黒坂）がオシドリグループの森田さんから「布で作った

オシドリのお土産って何かない」と相談を持ちかけられたことがきっかけ。坂出さんは、立体に見えること、簡単に作れるよう形はシンプル、オシドリの特徴を表現することなど工夫しながら考案しました。メンバーたちは「年をとってからの楽しみが増えました。これからも元氣を出して作りたい」とみんな生きいき。手作りだけに1個ずつ表情が違い、愛着と温もりを感じます。



まちの自慢  
藤原康洋さん（根雨）

オシドリという観光資源はまちの自慢であり宝です。これからも自然環境が守られるよう願っています。その姿は何度見ても感動します。この冬、皆さんも行ってみませんか。早朝が特にいいです。



高齢者の励み  
坂出清子さん（黒坂）

みんなでワイワイやっています。作品を買ってもらえるということで、楽しみほかに励みにもなっています。指先を使うのでポケ防止にもいいのではないのでしょうか。皆さんも参加してみませんか。



利用者の増加  
加納郁夫さん（根雨駅長）

オシドリは冬期観光の目玉。列車の利用率アップにもつながっています。その存在は、駅や地域の活性化に欠かせません。まちの玄関として駅も積極的に広報し、多くの人を呼び込みたいと思います。



Memory



オシドリを見てみたいという願いがかない、平成8年3月31日から2泊3日の日程で来町した東京杉並第二小学校の児童たち(当時写真)。オシドリを見たり、えさやりを体験。根雨小学校の児童たちとも交流を深めた。この来町がきっかけで今まで延べ40人近い子どもたちが日野町を訪れた。

# ドンダグリア交流

全国各地からドンダグリアなどのえさが届きます。そこから始まった交流がたくさんあります。10年前、東京の子どもたちがドンダグリアを送ってくれました。東京杉並第二小学校との交流は深まり、多くの子どもたちがこのまちを訪れました。まちに夢と元気を与えてくれた子どもたちを「オシドリ天使」と呼びます。

## 東京と日野町

## オシドリ天使たちの来町

### え付けの苦労に感動 東京杉並第二小学校の児童

みんなが拾ったドンダグリアをオシドリに。10年前、東京杉並第二小学校の児童たちからドンダグリアが届きました。当時、東京杉並第二小学校教諭の佐々木幹夫さん(日野町舟場出身東京都杉並区在住現在「西田小学校」)が、国語の授業で人と鳥をテーマにした「大造じいさんとガン」という物語を紹介しました。佐々木さんと池岡幸三さん

(日野町舟場)は同級生。ふるさとの幼なじみがオシドリにえ付けを続け、えさとなるドンダグリアを集めることに苦労していると話しました。

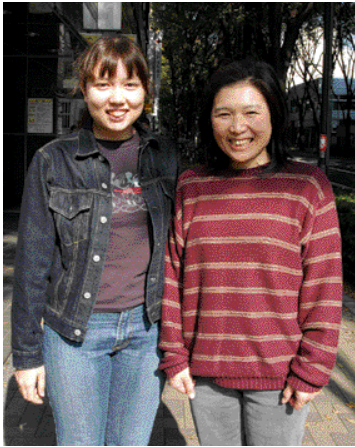
当時、佐々木さんのクラスで5年生だった蕪山ゆかりさん(現在大学生、杉並区)はその話に感動し、ドンダグリアを拾い佐々木さんに届けました。蕪山さんの行動を紹介すると、その輪が広がり、子どもたちは近くの公園や神社でドンダグリアを拾い始めました。この活動にオシドリグルー



平成12年11月、東京杉並第二小学校卒業生がペットボトルを再利用して作ったオシドリ人形を根雨小学校に贈る。

ブが感激。都会に住む子どもたちにオシドリを見せてやりたいと、平成8年に蕪山さんなど9人を招待しました。その後、佐々木さんのクラスでは秋のドンダグリア拾いが恒例になり、日野町との交流が続きました。

蕪山さんは「ただ、えさに困っているなら」との思いから始めたので、こんなに輪が広がると思いませんでした。10年過ぎましたが、記憶は今でも色あせることはありません。多くの人に感謝したいです。



松浦さん親子  
未来さん(左)・真理子さん(右)



斎藤さん親子  
ふじ子さん(左)・有里枝さん(右)

オシドリやドングリが  
結んでくれた縁。  
人と人の結びつきを  
大切にしていきたいです。

蕪山ゆかりさん

子どもたちがあこがれるまちで  
あってほしいと期待しています。  
わたしも東京で日野町のことや  
オシドリのすばらしさを  
伝えていきたいと思います。

佐々木幹夫さん



平成13年10月、オシドリグループ  
のメンバーたちが東京に行き、杉  
並の子どもたちと交流を深めた。

す」と話し、佐々木さんは、子  
どもたちがドングリを持って  
きたときは胸が熱くなりまし  
た。純真な気持ちに感動で  
す」と振り返ります。

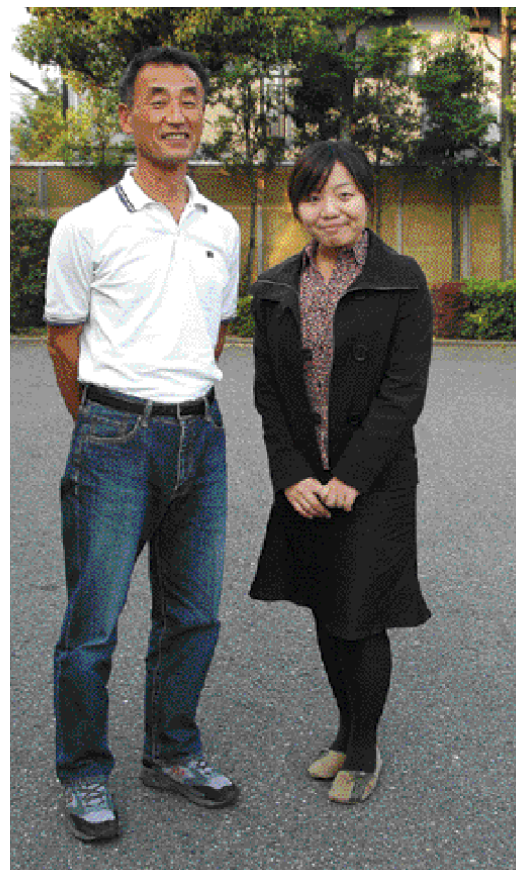
今でも続く交流の輪  
東京の地で根を広げる

平成12年に発生した鳥取県  
西部地震後も交流は、途切れ  
ることはありませんでした。

まちが震災復興を目指す時  
期に訪れた子どもたちは「少  
しでも復興に役立ててほし  
い」と、自分たちの小遣いや  
家族に協力してもらい寄付を  
募り、まちに届けました。

今まで延べ40人近くの子ど  
もたちがまちを訪れました。  
交流は、子どもたち、まちに  
とつても忘れられないものに

交流のきっかけを作った蕪山ゆかりさん(右)と生徒から慕われる佐々木幹夫さん(左)



なっています。

何回か来町したことがある

松浦未来さん、斎藤有里枝さ  
ん(ともに現在中学3年生)。  
松浦さんは「交流は大切な思  
い出。日野町は何度でも行っ  
てみたい場所」。斎藤さんは  
「ドングリ集めは先生の影響  
いい先生に巡り会えてうれし  
い」と話します。

松浦さんの母、真理子さん  
は「話を聞いて感動しました。  
芽生えた交流を大切にしてい  
りたいから」と子どもたちの  
小学校卒業を期に、14人の保  
護者で「オシドリ天使の会」  
を結成。そのまとめ役として、  
今も日野町にドングリを送り

「これからも交流を続けてい  
きたい」と話します。

ドングリ拾いが日課という  
斎藤さんの母、ふじ子さんは、  
仕事前に公園や神社に出かけ  
ます。「ドングリを集めてい  
ると、何をしているのって声  
をかけられます。説明すると、  
見ず知らずの人が協力してく  
れるんです」と交流の輪が広  
がり、知人の米屋さんも協力  
してくれと話します。

真理子さん、ふじ子さんは  
「距離は遠くても、心の距離  
は近く感じています。いつか  
行ってみたいと思います」と  
東京でも日野町のことを思う  
人がたくさんいます。



## ドングリ交流 東京と日野町

# 同じ空の下で 拾うドングリ

鳥取県日野町と東京都杉並区。遠く離れていても同じ空の下でドングリを拾い集める子どもたちがいます。写真でしかオシドリを見たことがない子どもたちは「日野町の人はいつも見れていいな」と話します。自分たちが拾ったドングリを食べる姿を想像しながら、今日もドングリを集めます。

西田小学校（東京都杉並区）2年生にインタビュー



国分敦智さん

はく製や写真でオシドリを見たことがあります。カラフルな羽がとてもきれいです。ドングリは、近くの神社にいっぱいあります。



中島清美さん

写真でしか見たことがないから、日野町に行って動いているオシドリを見てみたいです。いっぱいドングリを拾って届けたいです。



鶴間友理さん

エサが足りないと聞きました。人間もオシドリも同じ命を持っているから助けてあげたいと思います。友だちを誘って拾っています。



山崎頌子さん

先生の授業がきっかけでオシドリのことを知りました。みんなで集めたドングリをいっぱい食べて元気になってほしいです。

西田小学校の児童たち  
小学2年生が中心に集める

東京杉並第二小学校から始まったドングリの輪は、西田小学校（東京都杉並区）でも広がっています。昨年、西田小に移った佐々木幹夫さん前ページで紹介。冬鳥や木の葉について学ぶ時間がああり、オシドリ、えさ

なるドングリ、杉並第二小の取り組みなどを紹介しました。ここでも子どもたちは興味を持ち、2年生が中心になってドングリを拾い始めました。佐々木さんはお礼に、池岡さんからももらったオシドリのカードをあげると、子どもたちは大喜び。目を輝かせながら「大切な宝物だよ」と話します。

休日前になると子どもたちは、先生拾いに行こうと誘う。佐々木さんは「ほかに遊びがあるのにオシドリのことを気にしてくれる。その気持ちがうれしい。だからいっしょに行ってしまうんです。小さい手で、はしゃぎながら夢中

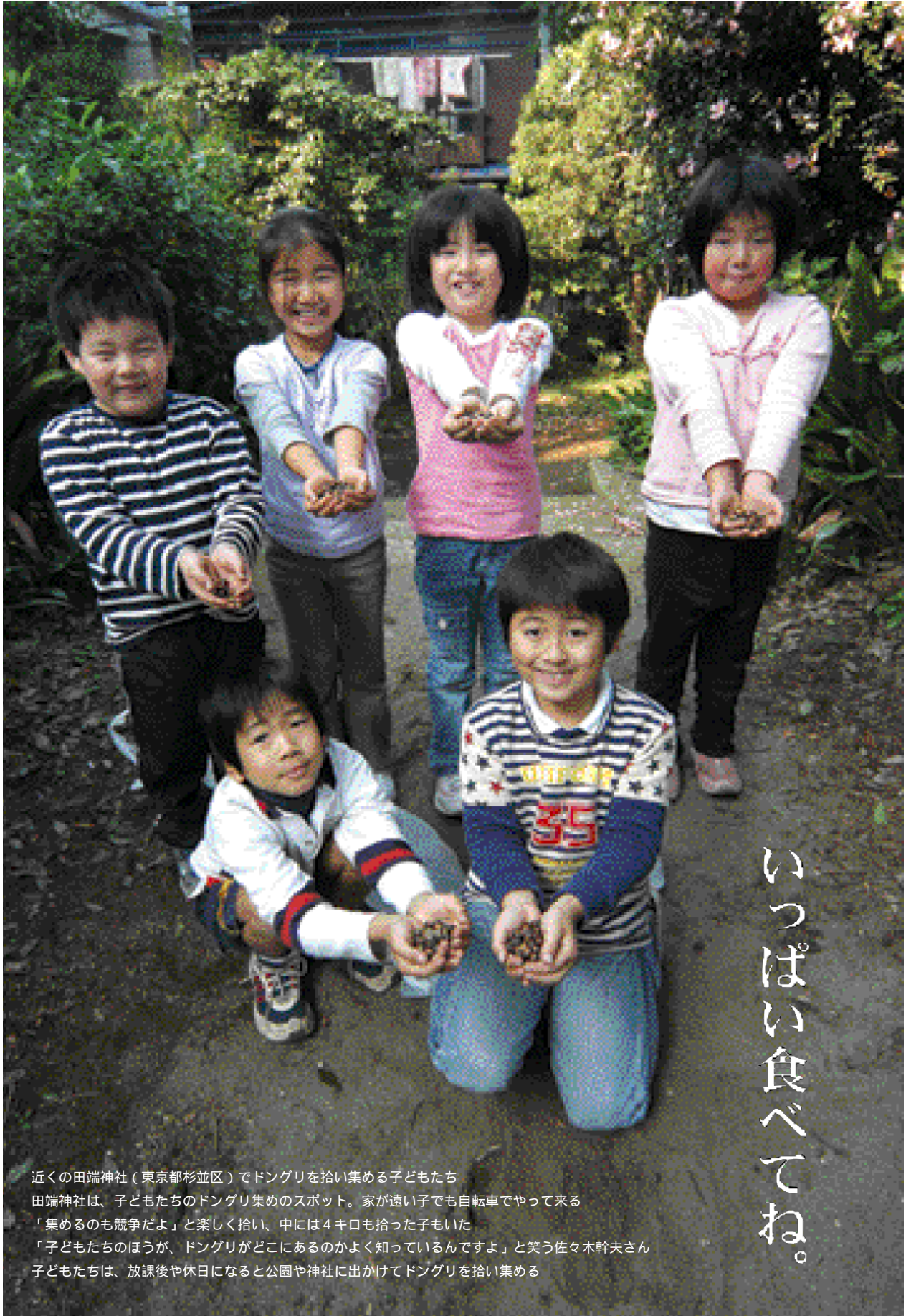
になって拾ってくれる。いか本物のオシドリを見せてやりたいです」と子どもたちの姿に目を細めます。子どもたちは、ドングリ集めのついでに野鳥観察や散歩したりと、自然と触れ合うきっかけになっています。



西田小学校近くには緑地公園やきれいな善福寺川が流れる。冬鳥も飛来する



西田小学校。児童は約500人



いっぱい食べてね。

近くの田端神社（東京都杉並区）でドングリを拾い集める子どもたち  
 田端神社は、子どもたちのドングリ集めのスポット。家が遠い子でも自転車でやって来る  
 「集めるのも競争だよ」と楽しく拾い、中には4キロも拾った子もいた  
 「子どもたちのほうが、ドングリがどこにあるのかよく知っているんですよ」と笑う佐々木幹夫さん  
 子どもたちは、放課後や休日になると公園や神社に出かけてドングリを拾い集める



# 町民ミュージカル おしどりの物語

感動の舞台

## 心に届け 愛 ひとつ



幕が閉じても鳴り響く拍手。  
今年で3回目になる町民ミュージカル。今回は、小泉八雲の小説「おしどり」を素材にした創作ミュージカル「おしどりの物語」を10月17日、町文化センターで公演しました。

出演者は、町内の小学生と大人たちなど27人。舞台の上で演技、歌、踊りを体いっぱい表現しました。

おしどりと人間の出会いを通して、世界平和や自然保護の大切さを訴える感動の物語は、多くの人の涙を誘い「出演者の演技がすばらしかった。心の奥までメッセージが響いた」と観客は大きな拍手を送りました。2回の公演とも満席になる盛況を見せました。





名演技で笑わせる。息が合う大人と子ども



獵師の村允（そんぞう）とおしどりのたえ。2人の愛の行方が涙誘う



魅了するダンス。体いっぱい表現



舞台の上で自分を表現。生きいきとした笑顔で本番を楽しむ





こいずみ・やくも

1850-1904年。随筆家。リック・ラフカディオ・ハーン。島根県。萩市。萩藩の英語教師として。妻。小泉八雲と名乗る。『浮城物語』など日本文化を研究し、ての姿を写真提供 小泉 凡さん

今年没後100年を迎えた明治の文豪として知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）。数多く出版された作品の中で骨董「幽霊滝（龍王滝）」と怪談「をしどり（オシドリ）」は、小泉八雲（以下ハーン）と日野町が深く関係していると言えます。

ハーンの文学分野は、翻訳文学、ルポルタージュ紀行文学（探訪記事）、再話文学（物語文学）などで「幽霊滝」「をしどり」を始め晩年の作品は、再話文学（地方に伝わる民話に、文学としての魂を吹き込み語り直す）にあたります。ハーンは、怪談話など超自然的（神秘的）なものには、

常に真理があり、人が生きていくために欠かせない好奇心や想像力を与えてくれるーと信じていました。ハーンの世界には、必ずと言って良いほど人間界と超自然界とが出てきます。「をしどり」「幽霊滝」もそうです。これらの怪談話には「人間の世界は人間だけで完結しているのではなく、自然や超自然的なものと同じ輪の中にあり、共生している」ということを伝えたかったのではないのでしょうか。超自然界は、自然を恐れ敬う気持ちを教えてくれ、人間に生きる目的や勇気を与えてくれる。「自然と共生できない民族は滅びる」とも言っているので「共生」ということをとても大切にしていました。怪談などの多くは、妻の小泉セツから聞いた話を元に書いたと言われ、人による語り（口承文化）の良さを大切にしていました。民話などの語りは想像力の根源です。そのことは今の時代にも言えます。耳で聞くということは記憶力や想像力を養います。また、親子のコミュニケーションにもつながっていくと思います。ハーンは明治25年、隠岐旅行の後、倉敷を通り熊本に帰る途中で黒坂村（現・黒坂）に立ち寄ったという説があります。



こいずみ・ほん  
小泉八雲のひ孫。島根県立島根女子短期大学助教授。小泉八雲記念館顧問。著書『民俗学者・小泉八雲』（1995）恒文社など

# 龍王滝

高さ70mから流れ落ちる龍王滝（滝山神社境内隣「日野町中宮」）  
2歳の幼児を連れて参ると首がなくなると小泉八雲が小説「骨董」の中で幽霊滝として紹介



# そしてこれから



森田順子

さん（根雨）

オシドリグループ事務局



日野町長

梅林豊

## 芽を出した人のきずな

オシドリ観察は、まちを代表する観光スポット。その人気と存在は、まちの代名詞とも言え、地域に与える影響は多大了。グループの皆様にはその活動に心から敬意と感謝を申し上げます。

まちとしてもこの活動を支援し「愛と元気なまちづくり」のシンボルとして積極的に活用を図り、地域の活性化に結

びつけていきたいと思えます。ドングリは小さいですが、長い年月を経て巨木となり、たくさんの実をつけます。オシドリグループのまいた種が10年という自主的な活動を経て、大きな地域の輪となり、人のきずな」という実をつけました。この実がまち全体に広がり、いたるところで芽を出すことを期待しています。

## 人と人を結ぶオシドリ

感動とやすらぎを与えてくれるオシドリ。その姿を多くの人に見てほしい。その思いで地道に活動してきたグループも10年が過ぎました。オシドリを通じて広がる交流と支援の輪。皆さんに支えられながら続けてこれました。日ごろよりご理解とご協力をいただき本当にありがとうございます。特に観察小屋に一番近い稲田さんご夫婦に

は助けてもらいました。人と人を結んでくれるオシドリを「天使」だと思っています。これからも夢である「鳥と人が共存していける環境」を形にしていくため、皆さんといっしょに環境保護について考え、行動していきたいと思えます。それにはまず、オシドリを見ていただくのが一番です。観察小屋でお会いしましょう。オシドリは元気です。

## それぞれの思い *Interview*

ひとりが始めたオシドリ保護活動。たくさんのオシドリたちが飛来するようになったわけではありません。支援や交流の輪が広がり、まちの活性化や人づくりにも大きな影響を与えています。



日野町ボランティアセンター  
**山田利美**  
さん（貝原）



(株)まちづくり日野代表取締役  
**窪田憲二**  
さん（根雨）

### 地域活性化につながる

オシドリ観察は、全国に情報発信できる観光資源のひとつ。集客効果はすばらしく、まちにとって欠かすことのできない存在です。

全国各地から多くの人が訪れます。ほかの観光資源と結びつけることができれば、地域はもっと活性化すると思います。

来年3月には、前回に引き続き「オシドリマラソン」をお

しどりヘルシーウォーク」を企画。宿場まちの風情が残る根雨のまち並みとオシドリを結びつけ、地域の良さを紹介していきたいと考えています。

オシドリ飛来もそうですが、何事も定着するには長い年月と情熱を持った人が必要です。まちづくりも長期的視野を持ち、将来を考えながら進めていかなければなりません。

### 自分にできることから

オシドリグループの地道な取り組みは、人と人とを結んで大きな輪になりました。

今、町内ボランティアの輪は、それぞれの地域や団体の中で広がりを見せています。

ボランティアとは特別なことをすることではありません。例えば、出会った観光客にまちの名所を教えてあげる。簡単な説明でいいと思うんで

す。その輪が広がり、地域全体が案内人になれば、まちも活気づく。というふうには、みんなの力が集まれば大きな力になっていくと思います。

「自分にできることはないか」を考えて、それを実際に行動に移してみましよう。ひとりでも多くのボランティアが育ってくれることを願っています。





## 取材を終えて

オシドリ飛来シーズンの前、河川清掃の協力を呼びかけると多くの人が集まりました。この写真は、ただの記念撮影ではなく「広がる地域の輪」を意味しています。オシドリグループ、支援する地域の人、全国からドングリを送る人、みんな「自分たちにできることなら」との思いで行動しています。オシドリグループの行政に頼らない自主的な活動が人々の心を動かしました。「自分には何ができるのだろうか」考えてみたい。多くの人のおかげがあって、今年もオシドリが飛来します。

取材 企画振興課広報担当 音田雄一郎

(資料・写真提供 = オシドリグループ、松本利秋さん、稲田匡宏さん)

特集 **鴛鴦** オシドリ  
おわり

# 広がる地域の輪



送ってください。



オシドリのえさ送り先（ドングリ、くず米など）

- 〒 689-4503 鳥取県日野郡日野町根雨 390  
オシドリグループ事務局 森田順子（電話 0859-72-0271）
- 〒 689-4503 鳥取県日野郡日野町根雨 101  
日野町役場 企画振興課（電話 0859-72-0332）